

令和2年度 第25回 福島県立光南高校 卒業証書授与式 校長式辞

県南の地に光がさし、希望に満ちた春を迎えつつあるこの佳き日に、福島県知事 内堀雅雄 様を始めとする御来賓と保護者の皆様の御臨席を賜るとともに、リモートでのライブ配信により一・二年生が教室で見守る中、第二十五回の卒業証書授与式を挙げることは、誠に嬉しい限りであり、皆様に深く感謝申し上げます。

ただ今、呼名されました一九九名の皆さん、卒業おめでとう。君たちの新たな門出を祝福しますとともに、今日まで陰に陽に支えてこられた保護者の皆様に、心からお祝いを申し上げます。

第二十三期生の君たちは、本日限りで卒業します。四月からの新しい生活に向け、気持ちに区切りをつけ、旅立ちの決意を確かなものにするため、卒業式というこの厳粛な場において、今一度光南での日々を振り返り、入学した時の初心を思い起こしてみてください。

三年前、保護者の方に見守られ、この体育館で行った入学式、そして翌日の新入生歓迎会で、君たちは光南生の仲間入りをしました。毎日の授業は、興味関心に合わせて自分で選択し、文系や理系、体育や家庭、音楽や美術、商業や福祉など、総合学科特有の幅広い分野を学んできました。スポーツ大会や文化祭などの学校行事では、クラスメイトと協力し生徒主体で大いに盛り上がり、三十種類ある部活動では、先輩や後輩、仲間とともに、切磋琢磨してきました。

しかし、丁度一年前頃から、日本でも新型コロナウイルス感染症が流行し、去年の卒業式の日には在校生は登校できませんでした。その後、全県一斉の臨時休業となり、授業はもとより、部活動もできず、最後の大会さえも中止され、まさに青天の霹靂、目標を失い、喪失感を覚えたのではないのでしょうか。

この一年、とても厳しい状況でしたが、君たちは、自分だけでなく、家族や地域を守るため、休校中のオンライン授業を皮切りに、マスク着用や三密を避けるなど、新しい生活様式に従い、感染症対策を行いながら、高校生活を送ってきました。この前代未聞の経験は、本県ゆかりの詩人、高村光太郎の詩に喩えるならば、君の前には道はなく、君の後に道ができるという、まさに手探りの日々だったと思います。

私は、君たちと出会った一昨年の四月から教職員とともに、多様な個性がコラボレーションする学校、社会の中で生き抜く力を育む学校、安心して学び続けることのできる学校の三つを経営方針に掲げ、一人一人の夢の実現に向け、教育活動に取り組んでまいりました。その中で、これまで勤めたどの学校よりも、生徒の個性の輝きと、大きく飛躍する可能性を感じました。

その予感は見事の中し、君たちは、コロナ禍にあっても、学業やスポーツ、芸術や研究など、様々な分野で活躍し、中には東北や全国の場でその力を発揮する者もいました。卒業後の進路も、これから受験する生徒を含め、全員が自分の夢を掴むため、必死になって努力してきました。

三年間の高校生活を通して君たちは、自分に磨きをかけ、無自覚のうちにも立派に成長し、自分なりの生きる術、自分の武器を手にするとともに、個性豊かな仲間たちと出会い

ました。この自分とは異なるたくさんの個性との出会いこそが、光南高校の最大の魅力であり、卒業した後も君たちを助け、時にはコラボし、更なる高みへと導いてくれることでしょう。

さて、君たちが生まれた頃の二〇〇二年は、前の年に九・一一アメリカ同時多発テロで多くの命が失われ、翌年には五十万人が亡くなるイラク戦争が宣戦布告されるなど、国際的に激動の時代でした。ところが今年一月のアメリカ大統領の就任式では、若き黒人の女性詩人アマンダ・ゴーマンさんが、分断を終わらせようと人々に呼びかけ、喝采を浴びました。

また、mRNAを用いるという新たな方法で新型コロナワクチンの開発に挑んだ、ドイツのビオンテック社は、アメリカの大手製薬会社ファイザーと連携してワクチンの大量生産を行い、たくさんの命を救おうとしています。このように、世界は今、国境や人種を超えて、ともに手を取り合い、課題に立ち向かおうとしています。

一方、私たちの住む日本は、長引く平成の不況の中、昭和の暗い歴史を教訓とし、戦争のない平和な日々が続いていましたが、二〇一一年三月、君たちが小学二年生の時、本県は東日本大震災という史上類のない複合災害により、たくさんの命が奪われ、甚大な被害を被りました。しかし、皆が力を合わせ、地域が一つとなり、絆を深めて困難を克服する努力を重ね、十年という長い歳月をかけ、ようやくここまで復興してきました。

時代が令和に変わっても、一昨年台風十九号や先月の福島県沖地震で、多くの方が被災されています。このように社会には、たくさんの課題が溢れており、そこに生きる若者には、戦争のように、争い、憎しみ合うのではなく、互いを思いやり、協力しながら課題を乗り越え、誰もが生活しやすい社会を作ることが求められているとは思いませんか。

本県出身の野口英世博士の師匠で、日本の細菌学の基礎を築き、三年後の新しい千円札の肖像画となる北里柴三郎氏は、「研究だけをしていてはダメだ。それをどう世の中に役立てるかを考えよ。」という言葉を残しています。

君たちはこれまで、高校生としてたくさんの人に支えられながら学んできました。これからは、社会の一員として、与えられる側から与える側へと少しずつ変わり、人々が安心して暮らすことができる平和な世の中を築いてほしいと、私は強く思っています。

結びに、保護者の皆様。本日の喜びは如何ばかりかと拝察いたします。皆様にとってかけがえのないお子様の教育に、私たちを信じて協力していただき、本当にありがとうございました。

そして、卒業生諸君。君たちの卒業は、もちろん、君たち一人一人の努力の賜物ではありますが、同時に温かい愛情を持って励まし支えてこられた御家族や多くの人のお陰でもあります。この旅立ちの門出において、お世話になった方々に感謝の気持ちを伝えて、しっかりとけじめをつけ、光南高校のシンボルである神の鳥・朱雀のごとく、立派な大人として、新しい世界へと大きく羽ばたいて行ってください。

卒業生のこれからの人生に、幸多からんことを心から願い、式辞といたします。

令和三年三月一日

福島県立光南高等学校長 郡司 完